

ダイズ茎疫病の被害は普通大豆は生育初期に、黒大豆は生育中後期に発生する

県内の黒大豆栽培ほ場では茎疫病の発生が多い。一方、普通大豆では発生の報告例はないが、富山県、新潟県では収穫皆無となるほ場も存在する。県内の普通大豆品種は何れも罹病性であり、将来の被害発生の可能性が考えられる。そこで、現地の茎疫病多発生ほ場において普通大豆の茎疫病抵抗性評価を行った結果、その発生時期が黒大豆と異なることが分かった。

内 容

ほ場試験は2008年篠山市内の2地区で実施した。茎疫病に対して抵抗性を持たない普通大豆品種として「エンレイ」、「サチユタカ」、「フクユタカ」を、茎疫病抵抗性品種として「Conrad」、「General」を、参考品種として「丹波黒」をプラスチックトレイで2週間育苗後、それぞれ60株（1区20株、計3反復）を6月25日に定植した。茎疫病の発生調査は定植直後から11月13日まで計15回実施し、生育初期（定植直後～7月15日）から生育中後期（7月16日～11月13日）にかけて大豆の地際部が褐変した株数及び枯死した株数を計数して発病株率を算出した。

その結果、生育初期では丹波黒には茎疫病の発生は見られなかったが、「General」以外の普通大豆品種においてわずかな苗立枯れ（1.7%）が発生した（写真1）。一方、生育中後期では丹波黒において川北ほ場で11.7%、八上ほ場で52.0%と多発生となった（写真2）。しかし、普通大豆は川北ほ場の「Conrad」で僅かに発生が見られたのみで、その他の普通大豆品種には全く発生が見られず、丹波黒に比べて極めて低い発病であった。また収量、品質への悪影響も認められなかった。

以上のことから、抵抗性を持たない普通大豆は生育ステージが進むことにより茎疫病菌に対して何らかの耐性を獲得した可能性が考えられた。

現地試験の結果から黒大豆では生育中後期に、普通大豆では主に生育初期に茎疫病の発生が見られたことから、大豆の種類に応じた茎疫病発生前の薬剤防除が重要である。

今後の方針

本試験では2週間育苗した苗を用いたため生育初期の被害が少ないと考えられたが、直播栽培では実被害が発生する可能性がある。今後、県内の様々な地域で普通大豆における茎疫病の発生状況を調査し、今まで明らかでなかった普通大豆における茎疫病の被害実態を明らかにする。

杉本 琢真（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2414）



写真1 生育初期の普通大豆（エンレイ）に発生した茎疫病



写真2 生育後期の黒大豆（丹波黒）に発生した茎疫病